

空



2009年

**SORA** 26号

箱庭(26) | 3

柴田佐知子

ひとり身を諾ふ花の種を蒔く

母の夜具白く八十八夜来る

警官の背筋まつすぐ青葉の街

神のごと花に水やる夏帽子

事務員の昼餉短し白丁花

青々と曲る黒潮夏蓬

箱庭の天地創造子に任す

夕暮の山が来てゐる青簾

船旅のごとき家居や土用あい

## 夕桜

白水良子

—九州大学ヨット部にて

事故死した長男を思い—

春の海此処より吾子は召されたる  
満開の桜に吾子の骨拾ふ  
まだ温き子の骨壺に桜ちる  
追悼弥撒に告ぐる子の名よ花曇  
七千日吾子は世に在り夕桜  
子の墓に桜並木の尽きにけり  
花満ちて子の命日のやつて来る  
白薔薇やオルガンに混じる神父の声  
子が逝きて二十五年を桜満つ

ロザリオのながき祈りや鳥曇り  
吾子逝きしのちの桜をまた迎ふ  
花びらを真横に飛ばし桜ちる  
海の日や海に逝きたる子を思ふ  
桜葉降りたる庭をそのままに



昨年ご復活祭の前「染卵」という季語を耳にし感動して思ってもいなかった俳句を考えだした。丁度その頃、夫が「日本の歳時記」という週刊誌を買ってきた。移ろう季節のはつとする季語に、私も俳句を作ってみようと思った。以前短歌は作っていたが俳句は難しいものと思いついたので、自分ながら驚いた。次の週刊俳誌が出るまでの一週間に四・五句ほど作り続けた。

秋に女学校時代の友人と会った時、庭の芭蕉を見て、彼女が破芭蕉とつぶやくのを聞きドキリとした。数日前に例の本で知ったばかりであったからだ。そして十二月初め頃彼女が運命の人となった。俳句を習いたいと相談をし、佐知子先生に吸い寄せられるように連絡した。「俳句とは」から勉強するものと思ったが、すぐに十二月となり、思い切つて出席し、あれよという間に二回目の新年句会では、その後の新年会まで参加してしまい今日に至った。もうすぐ七十九歳、初めて見る漢字や言葉に、俳句を知らねば此の儘死んでいたかも……と近頃では有難く思っている。初めて作った句が「ミサ終へし友へも分かつ染卵」である。

# 空作品評

頭より飛び込んでくる夏燕 高倉 和子

近所のビルの駐車場に燕が巣を作っている。餌を運ぶ親燕が頻繁に出入りしているが、スピードを緩めず見事な勢いでビルの中へと入ってくる。さて掲句、燕が「頭より飛び込んでくる」のはごく当然の姿である。しかし敢えてこう詠むことで、燕の鮮やかな飛翔が見えてくる。

クローバー傷ついてゐる二人分 中田みなみ

今まで坐っていた二人分の重量によってクローバーが押しつぶされそっだけ平たくなっているのだから。緑も滲んですこし濃くなっているかもしれない。「傷ついてゐる二人分」の表現の妙に驚く。作者の精神の若々しさに学びたい。

大いなる寝釈迦の空を鳥帰る 青山 悠

一冬を日本で過し春の訪れと共に北方へ帰ってゆく鳥たち。実際に大きな涅槃像があり、その上を鳥が渡っているのだから、「大いなる寝釈迦の空を」と表現したことで、その空が格別の空間に変わった感がある。たつぷりとした詠出がいい。

さつきまでつんつんした子金盞花 秋 千晴

このような子供の様子、よく分かる。そして忘れていた自分たちの子供時代の何やかやを思い出させる不思議な句である。「金盞花」という普段着のよな花がこの句には似合う。いい感覚だ。

白南風や校舎の角に目安箱 小林 朱夏

「目安箱」は徳川吉宗が庶民の要求や苦情を受けするために備えた直訴箱である。歴史の授業や時代劇の他では縁のない言葉であったが、校舎に置かれていたとは。生徒達の直訴箱であろうが、「白南風や」によって明るく仕上がっている。

泣けば済むさうはいかない葱坊主 苑 実耶

涙には弱い。ことに殿方はうら若き女性の涙には尚更であろう。かくいう私も泣かれるとめっきり弱いのだが……。しかし実耶さんは「泣けば済むさうはいかない」ときつぱり。手強いぞ。しかし「葱坊主」でその強さが可笑しさに変る。季語の選択がうまい。

白鳥の脚投げ出して帰りけり 吉村 撰護

飛ぶ鳥が脚を後ろへ揃え伸ばした姿を「脚投げ出して」と表現に工夫を凝らし作品。撰護さんは以前、角川書店の『季寄せ』に掲載されている全季語を作句された。その時、作句の鍛錬にということでも他に数人がチャレンジしたのだが、高山植物や祭などの見たことがない季語は、調べ上げないととても詠めるものではない。私も早々にギブアップしてしまった。成し遂げたのは撰護さん一人だけであった。努力の人である。

山折りと谷折りが見え初国旗 鳳 蛮華

畳んだときの折れ目が外側に出た方が山折りで、谷折りはその逆。元旦に掲げられた国旗にしっかりと付いた折り皺だけに焦点を絞った印象鮮明な作品。旗日にしか取り出すことのない国旗が端的にとらえられている。以前は祝祭日には家々に日の丸が掲げられていたが、近頃はみかけなくなってきた。旗日という言葉も知らない年代が増えていることであろう。

合歡の実や曇るといふは心にも 石川 叔子

空が曇る、鏡が曇る……というが、心もまたということであるが、これを詩へと昇華できるか否かは季語にかかってくる。たとえば「夏落葉」であれば、いわゆる付きすぎでどうにもならない。こは、さりげなく置かれた「合歡の実」の淡さがいい。

信濃より雪解雫の便りかな 野畑小百合

信濃は降り積む雪を憎んだ一茶が春の訪れを喜び「雪とけて村一ぱいの子供哉」と詠んだ豪雪地帯。その信濃より「雪解雫の便りかな」と俳句ならでは

の省略を効かせた一句。余計なものを削り取った勢いがある。

枝椽吉野の谿のうすじめり 堀 江惠子

古代よりの歴史ある地吉野。その谿を「うすじめり」の一語でおさめてスケールが大きい。

港より汽車を乗り継ぐ敗戦日 岸 千手

これは現在の旅の景なのかもしれない。しかし座五の「敗戦日」によって戦後次々と着いた大陸よりの引き揚げの船が一気に思い浮ぶ。大変な戦後の混乱のなか、やっと日本へたどり着き、そこからそれぞれの故郷へ向かっていった人々。「乗り継ぐ」の措辞が動かない。

薬みせぬ高さに木蓮開きけり 青木 朋子

「薬みせぬ高さ」が木蓮の花の高さを的確に言いとめている。具体的表現の技が映える。

連山の峰それぞれに夏立てり 長 憲一

大地の力が満ちてくる立夏。連なる峰々の一峰ごとに「夏立てり」なのだ。湧き上がるような清新の気が句を貫く。

一匹は漢の美称梅白し 田岡 千章

「一匹は」で、猫か？犬か？と思っていると、「漢の美称」ときた。漢一匹か。なるほど。字にも作者の神経が行き届いている。「男」ではなく「漢」でこそ「美称」へと続くのだ。白梅も凜と響いている。

ここからは恋文横丁朧月 今井 春生  
境内の膨れ上がりて鬼は外 田代 貞枝  
蕎麦屋にもこけしの姉さ山法師 中原 俊也  
風光る車の窓に犬の貌 森 紀子  
丸き目の猫の子に路地行きどまる 遠山のり子  
見上げたる頬に溶けゆく春の雪 犬丸 勝子  
潮の香や水仙支へ合ひて咲く 亀井 紀子

朧夜の情感、追儺の賑わい、ひなびた蕎麦屋、犬や猫の句の楽しさ、春の雪の実感、水仙の描写、いずれも的確である。



# 空集

柴田佐知子選

春潮に舳先あづけて水尾を引く 熊本 田島 洋子

風立ち出水て鶴引く日和となりにつり

引鶴のまぎれてしまふ空の色

山裾の時の水の温みけり

病む鶴の小屋に大きな錠ひとつ

如月の田の果てに立つ鶴の墓

千羽篠栗鶴万羽吊して遍路杖

うぐひすや峠近づく札所道

春暁やまた目を閉ぢて母に会ふ 福岡 星原悦子

助手席に無言の君を乗せて春

接木せし痕の消えゆくしだれ梅



魂は過去貫けば五月の風  
教へてもらふ迎火の焚きかたも  
外に出ず外見る父に小鳥来る  
冬深し黒き血の立つ試験管  
縄縷ひしころの父の手霜の朝  
リラ冷えや煎じ葉が滾り出す  
紅椿背中に鬼を蔵しけり  
鉄塔を繋ぐ架線や春田打  
白鳥の脚投げ出して帰りけり  
青き踏む地球は軽く廻りをり  
洗ひ場に野焼きの匂ひ侵入す  
逃げ水の飛んで海峡八ノツト  
山折りと谷折りが見え初国旗  
出番なき火見櫓の影法師

福岡 吉村 撰護

長崎 鳳 蛭 華